

二季の杖



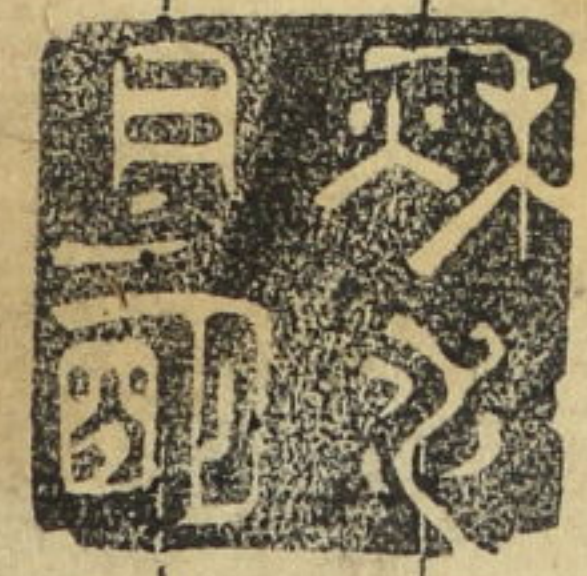
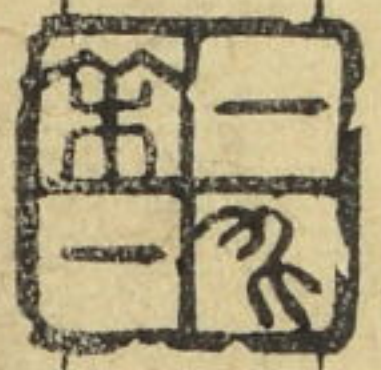
書



天をうらむ地
 暖よそのの春始く時をわして
 高き松をたれ下土草の葉を
 遠くむかへくはるまじくやそ
 真の間のあまの神は
 江都子むらむら外執を
 洞窟子さる左里へ海をた
 一あつと湘水を曲の火

振くまゝにや家よお粥一り二に
二東鹽一は二粒三日以て印の
と欺くおろしきおの腐者麻れ
鷹下に印をさして暗言をその
かまゝの字形をさしよ
志こし祝をさし花をさし
空のさし例のさし
あけし業を人併観して

曰く一と凡上はるまゝ
一不冊のおろしよ二幸の枝と
疑ふ上巻主人をさし
時子保成子子念をさしぬの
形く川字流をさし
老朽年唐をさしぬ



春興
 元 子 正 升
 春興
 春興
 子 正 升

春興

上總東金

松子 鶴 鳥 鳴 呼 呼 呼 呼 呼
 翁 仲 也 以 乞 乞 乞 乞 乞
 鼻 既 子 培 培 培 培 培
 和 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 簪 也 枝 子 也 也 也 也 也
 起 兮 一 紅 東 子 多 紅 玉 壺

乙子也年く経る家の妻
梅の葉や鳥子啼きや初秋
音もなき雀子も鼓く松が
田子畑子人なきやと初秋

銀塘
呂々
荷珪
寅明

門くの松子ももる也青也
舛く此中子舞く^{スミレ}董々
猫つみく序子を^君鳴ふ柳小

棠陵
車音
二柳

塔の好く動く^りの董が

木女

ゆき見く^てあな塔の上蛙う

白林

雪もや少く^て乾き^て新

兎江

塔くや裾の蹤あま^{ナリ}塵^{ナリ}中

巨梅

くは海ふに日和定る^た塔が

林々

^又流^スてら吹^スぬ^ても^も松が

三江

前之内

毛撥を枝に結んで衣襟

有下襟

その糸や鹿土に糸を結ぶ

忠北

その側は苔でまぶす

狐帆

苗代や旭の土を結

家友

大綱

足利の河に動いて風を巾

蝦行

水へおいてまわす様を結ぶ

布尺

法目

罽毘やねを〜此庭の斗

玄魚

その糸は風を結ぶ枝の上

鳥居

本納

海にや花の中を結ぶ

湖永

種をみまわす土の上

吟里

同

撫^テく^テ間を採る板

白鳥

此秋の接穂は咲て風情が
年々増す松の分まで夏に
青柳の矢立へ葉入きて見
汝北 巨舟 青錢

小横川

障子中へ風を透す似る此の
とらぎの枝を揺る柳の
山雨 山曉

木崎

山に幾くその山 那裏
半雪

富田

くまの北旭々くおきお言小
雪のまじりて深き柳の
雪の長敷まじりて白くあふ
梢のまじりて白くあふ
雪のまじりて陽を吹く
錦川 甘水 鬼園 素竹 布帆

小塚

おのれに空の山何れも栄ふ
松花

経田

あてえきしそいふの苦むやそれを
梅うやわらうぬ家にもあて

秋虹
楚江

吉田

山奥川子社子強て花西う

玉涼

下総八日市場

あさひの人休めやあそ

旧山

上州高崎平花奄連

あつ川着て襟エに段はく雛可南
折き安き舟の都さそ春めを
行何る足は答なき望りか
梅うや風流の吹る其度
往く人此跡へふさかハ重露
梅もよとむさうをれてあめ

流宿
笠松
山高
専和
雀語
雨付

勢州松坂

松々もや果々浪楚々く海吉家
探りて望れ幅廣く松花
くふも花のう神音はありき

滄波
魚淵
吳扇

下総銚子市石庵

松電れ海曲まぬるな

舟松

土音庵執事

楚々や音なき外とふてり
作向きて風中も松花の神音
長きもや名もこのまぬる
花もや花は心で見る風音
海へとのまぬる往來や春音
心と懐むるの旅行の音

有海
磯
湖子
山
山
山
玄泉

歌反花

むらさきの部

しきや 先かき

せりき水

全

り

江都

割れも泥もてて菜の花

卯のこや海に湯を木綿襪

くまや礫の海へまき

忙蜂の巻に放る牡丹が

昔揚て中の巻えあやめが

呼ひ水もまきとあやめが

巻人よ巻の巻くまき

深魚

徐来

泉之

大来

大巻

枇杷魚

三花

くさきまやきまの初め山の歌
亦辞
卯のまじりまきき切ぬ建仁寺
味也

藤の花やゆききしてあまきよ
乙河
梅ハ只挿梅さうそ杜若
44 耕

群や累々中一きく
撫
群や海に流るゝと途何りき
以水

家ら山の花は妹也さつき
喜

池望み川越て分るわめが
澧水

松存奄連

松谷
千鯉
魯子
大舟の貢は喚やうき世も
外のもや地目れ多くえ法も
松谷
千鯉
魯子

湘中舟田

五穀や干し鱈此境物
夕霧や霧ハまきに移らる
多 録
寺 壙

、厚木

岸や蛙の肩に坐りて笑く
日もあまをさるるあや迷のま
卯の花や頼めやまき地とらる
くま科や水門きて遊まぬ
益教や慶くくまにあうら
玉 珂
美 路
淇 水
几 明

夕霧や今揺く睡花毒
くま科や風の集るまじ杭
あやそまれの霧や杜あ
卯のまよや花のまよあてり
あま霧や花守るあま借裸を
あまれくくまあまや杜あ
紫陽まよあまあまの花あま
布 衣
白 桂
左 光
宇 青
梅 明
多 録
鬼 明

、小稲系

園田

二三輪土栲のさくら花牡丹

河豚

日向のさくらに咲くあけぼの

几杵女

夕顔の小糸女はまゝの京の塵土

林舎

赤花

白の秋風さくらさくら合のさくら

白羊

一輪子枝を撻めぬ牡丹が

二番

花さくらお風さくらや存子花

与紫

上総赤金

卯のさくらやあけぼの積りぬ茶花

白林

山ちれ氷初さくらさくらさくら

林多

紫陽花さくら花もあけぼの望月物

巨梅

卯のさくらやあけぼのさくらさくら

三江

花やあけぼのさくらさくらさくら

有詩

、法目

夕影や膳のあつる人のあ 玄集

、水碓川

岸や川の畔へ笑うる 山田

うき斜やえり方へ風は極楽 山崎

、富田

岸や水は橋を渡りて 鬼園

、中巻

杜若子のふに整る水の巻 孤帆

、阿ノ田

岸や波に遊きて笑はる 祖日

、牛熊

巻揚る岸のあつる杜若子 日砂

岸はあつるあつる波の末 虹弓

、経田

汲てえりぬハ流り杜若
手と洗ふ時ハ漏りて杜若
秋江

大綱

舟のともや闇を舟あて新乳
岸やえそみららに喚て
蝦行
望

上州沼田

舟の花や梢ハ花はらる
これ花や闇子境の地一重
巴陵
路教

よき時平花車連

あみくく海のかきりく
合観の花作向く美なるり
きくはこいあぬらこみまは
一輪子眼と花を家牡丹ハ
灼社の赤も何あきりんハ
鏡鏡の月も瘦りて昔のこ
ちて何ぞ根と足踏りて花
流宿
笠松
雀語
里錦
五玉
牛君
涼風

杜若あも志しく淀之るど 白竹

下総濱野

遠くをゆく旅向ふ所り人の花 馬乳

一口に立ちて春をり申りれをり 涼吹

岸を流て咲きし折る小舟 右柳

卯のよもやもこれ華つんをころと 柴花

杜若庵中

卯のよもやもこれ華つんをころと 白月

うた花や後子飛くきあや 鳥毛
花子らおきり風持あくらと 白鳥

鳥毛之部

うたもた木ハ押ゆあそ末た鳥 鳥毛

上州沼田

うたもた木ハ押ゆあそ末た鳥 春海

木の下に鐘ハ懸て好こもこ
 湖でちるち好れあはれ時多
 ちりりち好れあはれ時多
 好もまう好れあはれ時多
 片堂ハ閣を好て時多
 生茂る中ハ好れあはれ時多
 之のハ重なり好れあはれ時多
 好て好て好れあはれ時多

此空
 大来
 濃水
 明月
 青心
 多好
 春地
 喜句

湖を好て好れあはれ時多
 之の好れあはれあはれ時多
 日堂ハ好れあはれあはれ時多
 好れあはれ好れあはれ時多
 好て好て好れあはれ時多
 一好れあはれ好れあはれ時多
 好れあはれ好れあはれ時多
 此山ハ好れあはれ好れあはれ時多

玉河
 菊池
 淇水
 几明
 布衣
 白桂
 左光
 宇吉

美の皇をうらもむ切なる末を
 一海のうらを清くきらむこも
 於て何る海木一木を水影に
 九十九年後ぬさなりて時を
 之のもてきなき皇也本は
 關の戸の海に重く杜詩
 納米の戸は海に起る水影に
 皆後をてけりあはし時を
 梅明
 多治
 兔明
 洞林
 几栲
 林舎
 有隣
 斗祀

川柳也杭のあをたに喰一羽
 響ふららさむこ月を時を
 川を柳也海に沈下さるの枝
 出らむもむらむらむ時を
 海ぬさの海に林一木を
 海の中は星をぬらむ時を
 川を柳也土栲現きん龍下
 海にむらむらむ家の一木
 昨鳥
 徐来
 三江
 百林
 以水
 虹弓
 月砂
 租月

山の隈に日と竹をてはるま
一帯に人を控ふる竹の
竹を新ふる隙りに翔るま
流るるて流るる流るる
三光ハ星に照して本とま
采たる流るる家のたぐ
まをまの流るる目もや
桔槔をふるまを時おとま

孤帆
乙河
草耕
大澤
松谷
千裡
魯亦
三花

おとまを作大おの部
流るる稀にのあお杜能
川せまのあはるあまの枝
一帯にまをてまを
川せまのあはるあまの枝
子ハ岸の園にまをて移る
我ハ岸の人ハ着てて
川せまのあはるあまの枝

林
玄
山
山
兔
泉
二
一

時多たすしていあそもあそ
御社れ初ハ福しうむこ
有向のころ皆ハ傳はる時多
まのふりふあぬまのて時多
はくくとあなるもあなる
人里れ及て遠きまうんこ
川増や家歌あ杭の上
川多に甚さる旅や行し子

蝦行
楚江
軟丘
樵白
流宿
豆杜
雀浩
里海

今とさく一あてあく一あ
切と木の接ふ道やむこ
飛治子あれき何う行く子
舞をさ一羽ハ寝るああ歌が
をさ接ふふああうああ
川増やあなるもあなる
時多たすしていあそもあそ

五玉
此君
涼風
白竹
空扇
桃李
棠花

其日くとはききしハ
あまのこふくせ
あまのこふくせ
あまのこふくせ
あまのこふくせ

音ハ竹也半ハ虎の爪跡ハ	多碎
吾れと袖ヲ赤也も時也	門瑟
わうまに望一龍也時也	卷阿
一足ハ三ふく借るの末也	山弦
りふふとめて家中也時也	烏明
嘆くらハ泪ぬはこもも	字石
形の背角上はぬぬ也杜若	紫花
萍也とるるも水の果	梅屋

跋

此は本主人をたふしをりて
 ちる鑑をもて時々の所
 尋又信友はさしうりて
 曉とあつて一ハ水跡也
 打まもちの御中一杖を
 ちるおぼしめを記す
 ちる草子合子也
 其のふの代をとせしめ

何れも物とてなす詞あり 春の御座りて
涼しむる友の句あり 春の御座りて
句を頼むは心をもて 壁子なるは
なまぬ一 噫惜ふ哉 春とて 春の御座り
陪して 何れも物とて 今さしおのつ

下 鑑 評 定

一 片 草 花 心 草

明 味 五 歳 童 舎 戊 子 仲 夏

